

初任者研修での学び－1年間の振り返り－

教諭 大崎 あや乃

1 はじめに

1年前の自分と今の自分を比較して、何が変化しただろうか。年18回におよぶ初任者研修、校内研修、OJT研修など、1年間様々な先生方に様々な場面でご指導いただき、学びの多い1年となった。今回は初任者研修での学びや学校での日常のなかでの学びを書き留めておく機会を頂いた。教育研修センターでの初任者研修では、教科指導・生徒指導・HR経営など様々な視点で教師としての資質・能力の向上を目指した。教師になってはじめて実感したのは、理論と現実とのギャップである。現実はなかなか厳しいものであった。それでも、同時に楽しさなども見いだせた。今回は、授業における生徒との関わりやその成果・課題を中心に振り返りたいと思う。指導教員の平井先生をはじめ、多くの先生方のご指導をいただいた。この場をお借りして、感謝申し上げる。

2 初任者研修での学び

(1) 生徒指導の記録および情報交換

生徒指導に関しては、正直なところ赴任するまでよくわかっていなかった。理論やケーススタディなどで知識は少し知っていたとしても、問題行動が起きた時、全くといっていいほど対応できなかったというのが実際のところである。生徒指導では、他の先生方の対応の仕方を間近で見せて頂いたことが一番勉強になった。また、研修の後半には、各学校の生徒指導の事例を記録に取り、互いに事例を発表し、情報交換を行うことで、本校の指導方法だけでなく、各学校の取り組みを知ることができた。本校のように段階的指導という形で、学校に生徒指導の体形が確立されている学校ばかりではなく、先生によって指導方法がまちまちだという学校もあった。段階的指導という形で、学校が一丸となり、指導する体制が整っているということを大切に、これからも指導を継続させなければいけないと感じた。

(2) 異種校参観（近隣の中学校・小学校との連携・特別支援学校訪問）

異種校参観では、近隣の小学校の実態や授業参観を行った。「主体的・対話的な深い学び」をテーマとした、多様な手法を用いた授業展開や小学校におけるきめ細やかな指導の工夫や配慮を学ぶことができた。小学生であっても、ICTなどを巧みに操り、自分たちで授業を盛り上げ、授業に主体的に取り組んでいた。こうしたAL型授業を経験した生徒が高校に入学してくることを踏まえると、高等学校でもAL型授業の導入・普及・深化が急務である。以下の事例は、小学6年生の理科の授業におけるマトリックス表による思考の可視化とフローチャートによる実験計画の設定の例である。（写真1・2参照）

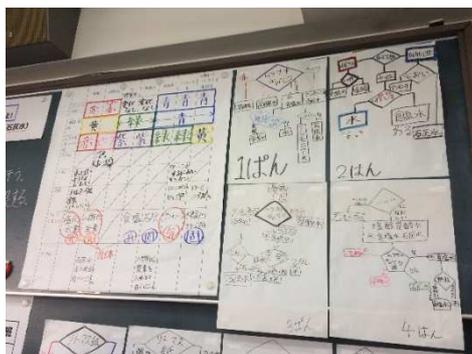


写真1

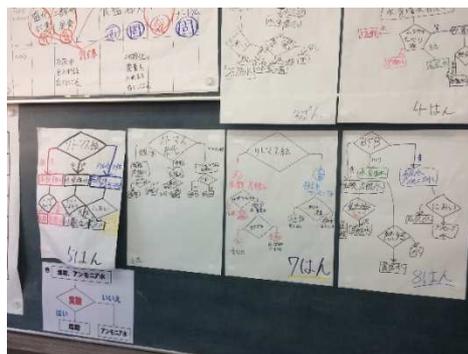


写真2

写真1・2を見ると、小学生とは思えないほど知識のアウトプットができています。さらに、理科の学習手法の原点でもある探究学習の過程がきちんと踏めている。このような手法は本校でも応用できる手法であると考えられる。さらにお互いに意見を交換する時間では、活発に意見が出されており、主体性を感じることができた。私も何度も授業でグループ学習を取り入れたが、その話し合いが滞ってしまうことがあった。知識を共有し、意見交換が進むように、図、表、手法を適切に選択し、使いこなすことができるようにしたいと考える。また、これからもAL型授業の様々な手法を学んでいきたい。

(3) HR経営案の作成と目標の設定

HR経営案の作成に伴って、平井先生をはじめ、多くの先生方に、本校の現状や担任として取り組むべき課題に関する意見を頂いた。それにより、担任としてのビジョンが明確になり、そのために行うべき具体的な取り組みを考えることができた。まだ見ぬ世界であることは確かだが、不安が少し解消され、同時に担任になることに対して期待感も持つことができた。具体的な目標を設定することで、3年間とまではいかずとも、先を見据えた指導ができると考えられる。環境整備や清掃の時間・時間厳守など、小さな積み重ねが生徒の学ぶ空間を作り、生徒の行動に影響を与える。私自身も授業や清掃において、率先して動き、生徒の見本とならなければいけない。次年度は、小さなことの積み重ねを大事にし、基礎基本の徹底を図りたい。

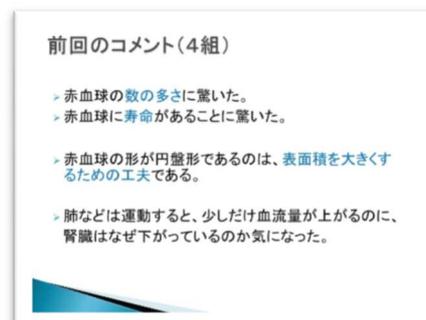
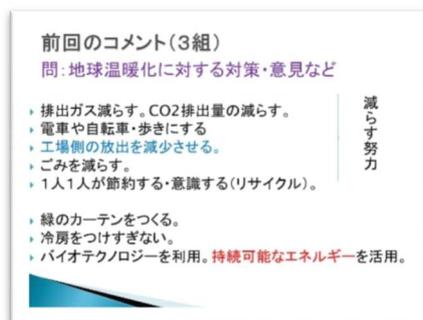
(ア)～(ウ)以外にも、教員としての心構えやカウンセリングの手法、救急救命法やグループエンカウンターなど幅広い知識を得る機会を与えて頂いた。多くの初任者の先生方と協同して学ぶことで、授業や生徒指導に関する意見交換を図ることができ、指導に役立てることができた。教員として求められている力量の多さにますます気が引き締まる思いだった。

3 研修の実践—授業における成果と課題—

(1) 振り返りシートの活用と共有の時間の設定

研修を通して、教科指導では、導入や課題設定・授業形態などさまざまな側面から授業改善に取り組み、実践報告や効果的な手法について初任者同士で議論した。そして私は、1時間の流れを明確にし、「課題設定」と「振り返りの時間」を大切にすることを心掛けた。夏休み明けの2学期から、毎回の授業の最後に、「この時間学んだこと・考えたこと・印象に残っていること」を振り返り、文章で書くという振り返りの時間を設けた。振り返りの時間を取り入れることで、単なる1時間で終わらせず、この時間は何をしていたのか、何を学んでいたのか、自分自身に問いかけることができる。さらに、生徒はまとめを自分で行うことで、自分自身で理解している所としていないところのメタ認知をする場とすることができ、また疑問を持って授業に取り組むことができた。そして、次の授業の始めに、取り上げたい生徒のコメントをスライドに載せ、全体で共有した。

ここでいくつか具体例を示す。以下は授業の初めに生徒に提示するスライドである。実際は文章の後ろに名前が載っており、誰のコメントが分かるようになっている(資料1参照)。



資料1のようにクラス全体での共有をすることで、他の人の考えや疑問をとともに考えるなど、協同的に学ぶ場を設定できた。毎時間の導入で共有の時間を設けたことで、生徒の意欲や興味・関心は以前より高くなったと感じている。資料1 前に注目させるにはどうすれば良いのか試行錯誤していたが、生徒に何も言わずとも 前を向き、スライドに注目するようになった。さらに他の人の良い意見や疑問に耳を傾け、お互いに褒め合っている姿が印象的だった。スライドに自分の名前が載っていると、生徒は嬉しそうな様子を見せた。私自身も生徒の理解度やつまづきを把握しやすくなり、授業改善や評価に役立てることができ、生徒も教師も双方に良い効果をもたらしていると感じた。今現在も継続して続けており、前は文章を書くのが苦手だった生徒の苦手意識も改善の方向に向かっている。

(2) 「主体的・対話的で深い学び」を実行するための授業の展開

教科別研修において、「どうすれば授業が“主体的・対話的で深い学び”になるのか」、その手段を初任者同士で議論したことがあった。各学校で指導事例を振り返り、アイデアを出した。結果的に、多様な学びの形態を実践し、生徒同士が意見を交換できる環境を設定すること、学校周辺の環境（自然環境や人的物資）を活用し、より身近に感じさせる工夫が必要であるという意見などが出た。そこで私は、2学期から生徒の実態に合わせて、ICTやプレゼンテーション・グループワークやペア学習・ブレインストーミングなど多様な学びの形態を授業に取り入れた。クラスの雰囲気や学力によって、効果的な形態はクラスごとに異なっていた。また、AL型授業を取り入れるにつれて、徐々に生徒も慣れていき、よりレベルの高い課題に取り組めるようになってきたと感じている。実際に今年度は、日々の授業で簡単に取り入れる他に、①班ごとに免疫に関する探究学習に取り組む、②班ごとに「世界のバイオーム」をプレゼンする、③持続可能な社会を形成し、環境に配慮した企業について調べ、壁紙にまとめる、といった探究学習を単元の最後に取り入れた。生徒は今まで学んだことを生かして、専門用語や流れを意識し、探究学習に取り組んでいた。知識のインプットは通常の授業でも多く行われるが、意識して知識を活用しない限り、知識のアウトプットがなかなか行われられない現状だった。生徒には「知識を使うもの」として考えてほしいので、探究活動はそうした場の一役を担っていた。日々の授業でも、友達との対話の中で、または文章に書き表す中で、少しずつアウトプットをしてほしいと考えている。以下の写真3・4は、実際に生徒が探究学習を行い、壁紙にまとめたものである。

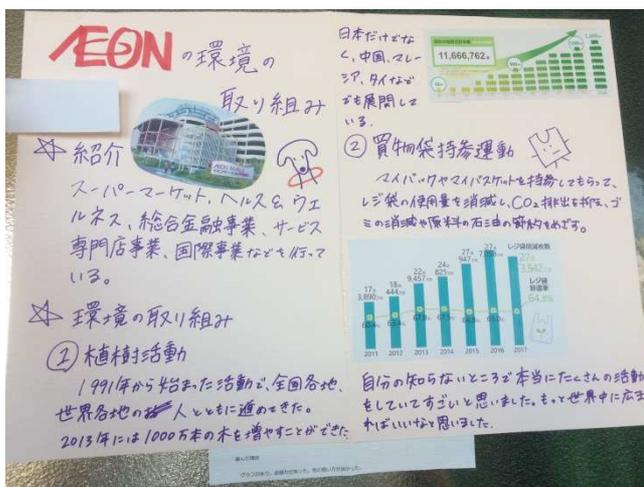


写真3



写真4

探究学習に真剣に取り組み、よくまとめた生徒には担任の先生方が優秀作品を選び、表彰した。生徒は、自分の作品が選ばれているのを見ると、記念撮影するなど、嬉しそうな様子を見せた。このように評価しあうことが大切だと実感した。AI型授業を実践すると、成果と同時に課題も見えてくる。話し合いに参加できない生徒（学力が足りない・単純にコミュニケーション能力が不足している）、ただ他の生徒の意見を写すだけの生徒、知識が結びつかない生徒などがおり、苦戦を強いられる毎日だ。それでも、私が講義で話したことよりも、他の生徒の意見の方が何倍も印象に残り、充実感や協同的な雰囲気生まれる。課題のレベルや言葉選びなど細かい部分に配慮し、班編成など生徒の実態に合わせて、柔軟に対応できるようになりたい。生徒も私も授業や学びに対して、PDCAサイクルの実行し、常によりよいものに変化するように心掛けることが重要である。

(3) 実験・実習の技術の習得

教科別研修では、指導案の作成などのほかに、物化生地各分野の基本的な実験・実習の技能を学んだ。ブタの腎臓の解剖・水の電気分解・大気圧を実感させる実験・岩石の採掘（写真5参照）・味噌から塩を分離する実験など、実験書にある通りに行うだけでなく、自分で考えながら取り組む実験なども紹介していただいた。今年度は生物基礎の授業において、次の2つの実験を行った。ブロッコリーからのDNAの抽出・ブタの腎臓の解剖である（写真6・7参照）。普段あまり実験が多くないので、生徒はいきいきと、さらに自ら疑問を持って取り組んでいた。ブタの腎臓の解剖では、初めて腎臓を触り、においをかぎ、肌で臓器を感じていた。単元の中で、最も印象に残っている授業を聞くと、多くの生徒が「腎臓の解剖」を挙げた。自らの体験が鮮明に印象に残っているようだった。こうした実験・実習を次年度以降はさらに取り入れ、考察まできちんとできるような授業展開を考えたい。さらに、発展的に実験の計画を立てるなど、答えのない問いを設定したいと考えている。そのために、日々の授業における知識の十分な理解を促し、安全性やルールをきちんと身に付けさせたい。



写真5



写真6



写真7

4 まとめ

教師人生はまだ始まったばかりだ。とりあえずやってみて、結果を評価し、また新たな策を練る。このサイクルを大切にしながら、試行錯誤していききたい。また、多くの先生方の知恵や経験を参考にし、1つでも多くのことを吸収していききたい。様々なことを吸収し、体験し、人間として、教師として、幅を広げていききたい。